



史上最年少大関 (下)

平凡な剛を望んだが

まさか我が子が21歳で大関になるとは心底想定外だった。昇進問題も千秋楽の敗戦でお預けになるとばかり思っていた。昭和35(1960)年名古屋場所。東関脇で11勝にとどまったが、出羽海相談役(元横綱常の花)の鶴の一声もあって柏戸の大関昇進が決まった。7月12日だった。旧櫛引村から名古屋に駆けつけた母かつるは驚いた。当時52歳。報道陣に7人きょうだいの次男である息子のことを問われると「んだのー」「んでね」など、時には考え込

み大方、庄内弁で答えた。「小さい頃から手のかか

そのまま置いて山形に戻ってきた夫と大げんかしたくらいです。でも結局入門してしまいました。入門した以上は立派なものになってほしいと願っていました。今は大関になった姿を見て夢のようです」と感激の面持ちで語った。

シンプルなお口上で

香院だった。昇進の知らせを聞き付けて近所の人たちが続々集まってきた。使者は東関理事(元幕内天城山)と甲山検査役(現審判委員、元幕内小松山)。柏戸はあ

待があるからだ。そして直前の名古屋で大関昇進が決まったから、巡業が盛り上がるのは当然だった。7月27日午後8時前に鶴岡に到着し、市内を凱旋パレード。料亭「新茶屋」で祝賀会が行われた後、山添の実家に着いた。その後も深夜まで宴会は続いた。そして翌朝、鶴岡市営球場で行われた巡業会場に直行した。同球場は今も鶴岡タウ

ンキャンパスとして慶應義塾大、東北公益文科大の2大学の施設が建っている。朝稽古から続々入場。地元の英雄を一目見ようと朝稽古から観客が続々詰め掛けた。柏戸の強さ、晴れ姿を見たい一心だった。だが、これに立ちほだかつたのが横綱若乃花。当時32歳だった。「柏戸来い」の声とともに三番稽古(同じ相手と連続して行う稽古)が始まった。歓迎疲れの二

開きがあるのだ」と地元ファンは目を丸くするばかりだった。だが「応援のしがいがある」と横綱昇進に向け、また盛り上がったというから故郷はありがたい。横綱との違い知る。20番の稽古の後「柏戸にとつていい稽古だったろう」と若乃花は余裕のコメントを残した。柏戸は「横綱は強い。目まいがするほどだった」とため息をついた。

伊勢ノ海部屋(現大相撲夏巡業が行われた)の宿舎は名古屋市中区梅川町の寺、梅

内で大相撲夏巡業が行われていた。柏戸への地元の期待。同球場は今も鶴岡タウ

大関昇進が成った日。息子・柏戸を名古屋の宿舎でいたわった母かつる



大関昇進が成った日。息子・柏戸を名古屋の宿舎でいたわった母かつる

◆昇進メモ 柏戸の昇進前3場所の合計は30勝(9勝・10勝・11勝)で「三役3場所33勝以上」の今の基準には3勝及ばないが、一門系統別対戦制度の中、横

綱・大関全員と対戦。加えて4場所連続三賞受賞の勢いが加味された。毎週火曜日付に掲載